ことはの玉緒　三

ホ 2
143
3

別
門 號 147
巻 3
同攻會印

詞瓊綸三之巻

え

○左の結びハ。紐鏡の右の行の結ばるゝ辞にて。一の巻に出せる三轉倶に結めし但し三轉のうち。ぞや何こそ結びを紐鏡中の行左の行乃定まり結びにて。其外ハ大かたみだりに結びかされをたゞ徒の結びを三轉の中の行左の行の辞を除きて其餘をおしなべて右の行結むすび乃さだまれる辞のごとくなれど。てにをはそも何までも麁く当らし。猶るなりしいまだ此をも右の行に定むることは。かの三轉の辞どもて結ばるれぞのや何こそに對して。かなふなれどさだまれるこの分がゆゑなり。

○動かぬ言よりて續くを

古 十九 青柳を片糸によりて鶯のぬふてふ笠を梅の花笠

拾 一 あらたまの年立かへるあしたより待るゝものを鶯の聲

新 六 おのづから音するものを庭のおもに木葉吹まく谷の夕風

同 五 さびしさをみ山の秋の朝ぐもり霧にしをるゝ槙の下露

後 十七 よをそむく苔の衣をたゞ一重かさねバうとしいざふたり寝ん

新 十一 わが戀を槙の下葉にもる時雨ぬるとも袖の色に出めや

同 十七 時しらぬ山をふじの嶺いつとてか鹿子まだらに雪のふるらん

○いひかけて續くを

後拾 十九 かへるさをまちこゝろみよかくながらよもたゞにてをやましろの里

千 十四 行末をいつきの宮のみしめなは涼しき秋もなきよなりけり

新 十七 常磐なるむかふて出しらずとも來りきてをあはれちらの里

○をゝ主ぬる格なく

左 二 ぬるきくなりにしすゝき秋まさもいろをくらくて花をさかせけり

同 四 いつ川をとをらきをよるぬぐ秋の夜ぞ招きふてるかたりなりけり

これらハなどいふにおほくまさるまでも
又一つの格なり

左 四 里を行きて人をふりやし宿ならや庭もまがひを秋のみゆる

同 五 秋をきぬのみぢを宿にふりしきぬきるをかてよふ人を尋し

後 五 雨の光こし戀をつまてし秋風をなふより雪ぬ森のかをる

新 五 心しをこきを風に木葉をちりまてよまく虫を聲よるなる

右のたぐひ一つは格なり 又ことゝかなとを對へていへる

古一 み山に[は]松の雪だにきえなくに宮こ[は]のべ乃わかなつみけり

同 人[は]いさこゝろもしらずふるさと[は]花ぞむかしの香ににほひける

同三 こゑ[は]して涙[は]見えぬ郭公わがころもでのひづをからなん

拾十一 いかにせん命[は]かぎりある物を戀ひ[は]わすれず人[は]つれなし

右の同じやま八の歌と。郭公八その歌と八二つのはの下によく〳〵對あり。人はいさの歌八上のは八花と對ひ。下のは八對りどいかでせんの歌八上のは八下句と對ひ。下の二つのは八前にかゞれる一格のはなり。
又は二つはに二つある歌

古一 年ふればよはひ[は]おいぬしか[は]あれど花をし見ればもの思ひもなし

○一つのは

古十六 かずかずに我をわすれぬものならば山のかすみをあはれと[は]見よ

後十 たなばた[は]天の川原を七かへり後のみそかをみそぎ[は]せよ

新勅八 かへさばさかる山乃峯おとにさへあるこころをしをり[は]せん

菱万下 たのひと八たゞさへやかへ滝る糸雲をたぶり[は]して

いづれも上の句なるを下にをとまれるに をを略きてもといへる歌も
千載集十七にあり

○わきてのこのは

後拾三 五月雨[は]みづのみまきのまこも草かりほすひまもあらじとぞおもふ

同 さみだれ[は]見えし小篠の原もなしあさかのぬまのこゝちのみして

これらの五月雨はみえといへるは常のはにはあらし

○では

古十一 春日野の雪まをわけておひいでくる草のはつかに見えしきみ[はも]

同十七 よしの葉りゆりつむ雪のうきをまきて本くだちゆく永さうの［なも］

同九 ・あづき枕にたゆたに妹と我と寝ての枕の雪ぞふり［なも］

万三 やき津べに我がゆきしかバ玉くしげ打信の市路にいひてしこら［なも］

此辞万葉集にハあまた見えたり古今集にハ見えず。いと古きことばなり

○強く添ふる

［ ］ぞも 三の巻ぞの部に出せり

［ ］やも 四の巻やの部に出せり

［ ］かも 四の巻かの部に出せり

［ ］いづくハ 四の巻何の部に出せり

［ ］こそも 五の巻こその部に出せり

［ ］よりも

右のあづひのもハ。みな強く添ふるのこゝろにて意なし。ぞりのぞきてもおなじこと也。又もにかへて。［ ］ぞも［ ］やも［ ］かも［ ］よりも

といひてもおなじことなり。

○なや［ ］ 四の巻欲見（みまく）ほしやの部に出せり

［ば］

○見（みず）ずば［ ］ 既に然る事をいふと。未然の事をかけていふとの二つあり。既に然る事をいふハ。花さけば。花ちれば。月出れば。月見ればなどいふがごとし。未然の事をかけていふハ。花さかば。花ちらば。月いでば。月見ばなどの如し。さて既に然る事をいふばハ。どもと対ひ。花さけばと花さけども。月見ればと月見れどもと対ふがごとし。未然の事をかけていふばハ。上を清てともと対へり。花さかばと花さくとも。月いでばと月いづともと対ふがごとし。

上を清むとハ。かハくの清むでハづの清むるがおとし

○をば　これハをもをばをてそをやを通じていへる也。かく
のごとく通ずるハ。をばのばのこと也
をば二つを對へてよめる歌
古八　秋萩の花をば雨にぬらせども君をばましてをしとこそ思へ
○しらば　此しらばのしもをはぶきてしらとつゞくるハ。其結びの
しらと一つ也。又しらばハしらばどもと對ふ辞也。
古十五　ゆるくしも美ふえしらば遊らり紀思ハねかりそえらけかりける
同十八　旅を忘るにそ紀らしらなりしらばうれ見きみつのたよりと成る紀
後九　秋の田のいねてふ志らてうけしらば思ひわづらふかれぎなし
新十六　ゑの光こし人をまつらは山の尾ふきよ又しらば月をいりたき
ふしなばてしかばといへるも有
拾十二　身に近きのたよりふしなば思ふまど人乃たのまんたとぞおぼしき
後拾十九　むかしみし所のたよりひのうげをえてしなば身へ本かるもられしかりなき
○なば
古十五　われのみや世をうぐひすと鳴わびん人の心の花とちりなば
後八　山ちかく見づらしきなく帰る雲ちろくやあらん年つもりなば
古八　かへる山ありとハきけど春がすみ立わかれなばこひしかるべし
同十三　あそびしてこよひあらなば春雨の長くや人をつらしと思はん
なば二つ有るハ
後六　ちぐさにもほころぶなば人よみえせもいへどちりなば惜しきを秋萩

○てだ　これハたゞだといふことをかさねてなだとおなじく雙ぶ辞にて　くらべてあげてとおもふなり

もし六の巻の後に読るの轉り
くはしくいへり

万十五　秋さらばあかる鴈が裳ぬらしぬれ君が伊勢船乃縄しらでてだ

古一　うぐひすが花を離りうつしてそめてだ春ハちぐさに色かはりなまし

同七　王がよりひ君が八千代をしらうそへてそめおきてだ思ひ出ふせよ

同八　わするてだわどをへだ川と思へだや加川見あがりたゞ見て恋しれ

同十三　みちのく有といふなる名取川なきなをとりてだくるしかりけるを

同　王が恋を春のひかり縁てだあし引の山下ちぎなれなみに出ぬなし

後十一　あひみてだなぐさむやと思ひしになごりしもこそ恋しかりけれ

新十八　大空にてらむ乃色をいさゝてだ天の下まはるまゝをもむべき

日記　たゞあらじとハかりたくくらひなゆゑにてだいふくやしからむ万
そのてだいづれもてだ読るべき辞なり。後によむべしむがあと
あり。万葉にもみな読る事なれど字をあたる。古今十五あまげてを妹
背けむ山のうへのまびひのてだと八異なる

○せだ　せだといへばおほくハ下にましといふ例し

古一　世中にたえてさくらのなかりせだ春のこゝろはのどけからまし

同五　もみぢ葉のながれざりせだ立田川水の秋をばたれかしらまし

同六　梅の香のふりおける雪にまがひせだ誰かことごとわきてをらまし

同十四　いつはりのなきよなりせだいかばかり人のことのはうれしからまし

同十一　[illegible]ぬれてみるめあひせだ我袖乃なみだの川[illegible]

日十二 おもひつゝぬればや人のみえつらん夢としりせばさめざらましを

又せばと有りけるハ上へかへりてましといへり

古十五 なすまし草たかみゝしゝましを あふことのいとかくかたき物としりせば

後拾一 よの中にうかふなるかゝらまし 山がつの送るふぢのころなりせば

又ましといふべきをまれにハかゝる こそハいとくまれなることし

古四 をしむべしあふかるほどべりやぞりせば いやなくあざの名をやたちなん。

後九 よろづ河海に流なむかる事のありせば なふかハ名を惜しもせん。

拾二 さよふかく旅ぎそぎりせば郭公人ばてふきくべかりける

○上にふをはてふせばといひて後なる五の句ふの説をいだせり

○ましかば 上ハ下にかなふ又ましといふ例し

古十五 人しれずたえなましかばわびつゝもなき名ぞとだにいはましものを

後二 山里にちりなましかばさくら花にほふさかりもしられざらまし

日十二 ゆくさき乃なからましかばふる露のおきてわびしきおもひせましや

拾十九 おやのためとおもはましかばとひてまし我子の子にハなりぬべし

新十六 露のいのちきえなましかばかくばかりふる白雪をながめましやは

又ましかばと有りけるハ上へかへりてましといへり

後十六 思ひ出てとふことの葉をたれ見まし身のしら雲となりなましかば

新十三 たれゆきて君につげまし道芝乃露もろともにきえなましかば

日十九 うれしさもいかばかりにかあらへまし故郷人もともならましかば

又ましかばと有りて上へハかへらで下にましをもなくてとぢめたる有

拾三 いたづらにすぐる月日をたなばたの逢夜の数とおもはゞ［ましかば］

こは逢夜のかずと思はましかばうれしからましといふことをバ下にふくめていひのこせる格也次の歌ども皆同じ格也

後拾一 花見てぞ身のうさもわすらるゝ春ハかぎりのなから［ましかば］

同八 みやこいづる今朝ばかりだにはつかにも逢見て人にわかれ［ましかば］

同十五 月影のいるをおしむもくるしきに西にハ山のなから［ましかば］

同十六 いろつきはうすくはなりてそきえゆくまゝこれを入おとおもはまし［ましかば］

新十三 たのめぬに君来やとまつよひのまのふけゆかでたゞあけな［ましかば］

同 覚のめぐらし云は紫だうりぞめ出て浅茅が露ときえな［ましかば］

右の格後拾遺集に殊におほかりしを後もつぎつぎおほかり

後拾十五 山の端はかゝら［ましかば］池水にいるさの月もかくれざらまし

こは前にかはれどもましかばと切てうれしからましといふ意をふくめるハ前の格に同じ

拾二十 よの中にあら［ましかば］とおもふ人なきがおほくもなりにけるかな

こはあらましかばよからましといふ意なるを其よからましといふ言を例の略きてとゞまれる也

右の如きも猶おほく下に言ひふくめていひのこせる例也。他にも

あまたなし。ましかばハ殊に多く有て一格の如し。ましかばの外にも後拾遺に見ゆ

おほくの逢夜はかずのまびつもくる月毎の七日ありせば　同十九　あはでやみなむ

せざるべきかのこひは今ぞいくよのよりとやいひし　千載十三　ちぎりこそ

見の底よりもぞたちぎりしるはうつありせば　こまつるも皆いひさして

てまをぬくめる紫するも心の色にうつるはさらむとえいもぞ変はざらむ

妹がたりをまれぬらしえぞ　同十人云ふ衣世の常はさぞ　右妹とゝもと

したがひさりし孫ぞ　同十五　秋萩の下に衣裳ぬきぬらむと思ふ心ぞ乃

はなしそりてぞあまつるも同じ

○ませば　こはましせばと詞まへしるし。是もおほく八下にましといふ

後十一　夢路にも宿かす人のあらませば寝ざめに露ははらはざらまし

同十九　さらばよと別れし時にいはませば我も涙におぼれなましを

拾八 万二　飛鳥川しがらみわたしせかませば流るゝ水ものどけからまし　よどにあらまし 万

新八　何とも無き人の命をしらませばなにはの芦に紛らざらまし

後拾十二　秋霧のたてる門あらませば忍びてましものを川をいかでしらすべき

下にましといはざるは

古十五　かくばかりこひんとかねてしらませば妹をば見ずぞあるべかりける。

此歌拾遺集十四にもをさめて入られたり。さて万葉にもませばといへるは多かれど此歌の如きは下にましといへり

○ぬるの上の結び

古四　天の川浅瀬しら波たどりつゝわたりはてねばあけぞしにける

新二 夏十　まれにくる夏の桂にいかにさらば結び小松が原に蛍飛ぶ也

此歌万葉にて八巻の歌にて家持の春の歌に入られたるもあれど今は万葉のまゝにてこゝにも出せり

此辞万葉にもおほし。七の巻古風の歌にも出せると

○なや　此辞三あり。皆四の巻やの歌に出せり

も

○もの結びも合くはだ。を結びしいへるがおほし

○初ぬるにて結ぶも

新十七　花ちるでたゞ紫の戸をさしてあるもみよしの山

拾古一 後撰て　明ぬるをまじるをかけて見渡せば庭のうへ[と]たき川に流

兼輔集　時ちなきふるほそ跡しげくまばし山べりせのせぬ[と]すゝくめぞ

令八　ぬを人とけふ[と]こゝろりけよ中に人乃こゝろをさるふきこれぞ

新十八　さくかぶの花ありとかく[と]ほじ心まし花宿にとぶくよる六位ん

○いひかけて結ぶ[と]

後十五　こまやこのゆくをとゞむるとわきまへてきると思ふる[と]たか坂乃関

令七　志のぶとちひ[と]なぎさのあまをぶね浜のうきても今ハるのまよし

千九　年ふれへぐくむしろを志のぶころのうれなつきて[と]ふちころのさと

新古　春立庭のむし荻うちそよぎて人まち君を[と]あきの夕ぐれ

旧十七　一すぢに思ひきて[と]すゞだの原よりふくる風の音かな

○[と]をうくる格

古一　君ありしでしたまふる見せんうちのひとを[と]きみを[と]まつる人ぞある

新千　まちがなるうつ川の山べのうつくし[と]美よ[と]人ふゝむをぬありける

古二　ふるさとにこめてまつのゆく[へ][と]まつるをまふまちし帰[と]このひふりけり

新十五　見て[と]又は[と]見まく路ありしかりし花のさかりハるやしぬらん

これしハつよ此おとなき

後拾六　おのえちうる霞てきてわくこそをなき時雨きるよ[と]まくさとせぬよ[と]

こまハそぢそうしはる如ふ一年しれまて出る

出つきふ何ハ

旧十四　白露[と]ゆふ[と]此世[と]まがらし[と]たとへていまぞ久しかりける

これは一つできふ何につくなり

又二つ並ニつきたるを

古十三 忘られ[も]しがらみ[も]たてど難波なるみをつくし[も]いふあたりひさしこ[も]いそじ

後十五 これやこのゆく[も]かへる[も]わかれつゝしる[も]しらぬ[も]あふ坂乃せき

後拾四 秋[も]秋こよひ[も]こよひ月[も]月ところ[も]ところ見る君[も]きみ

よつかさねたるハ

六つを

六帖 をとし[も]こぞ[も]ことし[も]またこむ[も]明日[も]けふ[も]こぬる君

○んの末の[も]

千四 人[も]がな見せ[も]きかせ[も]萩が花さく夕かげ乃ひぐらし乃聲

千五恋 わがなかは萩の下根よあさく虫の音をしのばれに見せ[も]きかせ[も]

此歌も右の和泉式部が歌によりてよめるにや。見せんきかせんといふこゝろ

なりに六百番歌合に有家卿のよまれたるうづもれるをみがきうに聞えし見せもきかせもと

山おろしの風　千八上の和泉式部が歌に。見せもきかせもせんといふこゝろを

侍りて。見せもきかせもなき山おろしの風といふことによまれたり。いづれにも

後なるも此意に侍りよめる歌なり

んをもといへる例。あるは萬葉集十七の巻古風の歌に出せり。

それ萬葉集にうべもといふを都子牟とかきて。うべもを宇倍とうつしき

又清寧紀の詔にはむといふべき所にんとかけるも又いしこもおなじ例也。

○将く係る[も]

古十五 あしべよりくもゐをさしてゆく雁のいやとほざかる我身かなし[も]

同墨滅し まがせこがくべきよひなりさゝがにのくものふるまひかねてしるし[も]

拾三万八 秋たちていくかもあらねど此ねぬる朝けの風ハたもとすゞ(さむ万)し[も]

同十三 わがせこがありかもしらでねるよハ暁がたのまくらさびし[も]

同二
郭公なくやさ月のみじか夜もひとりしぬればあかしかねつ[る]

千二十
神代よりはちす浦りしなみても色ならん年の限をしらば[る]

後二
百十
まてとはばちるべきものをおぼつかなし[る]花陰にして

此ありしるを今の本にありくるとかけるは誤なり六帖にもありしるとあり
かくぞ正しき万葉の訓もありしとし

たのみならしる あはしる など。ち飴るるとある格あり。万

葉にハ猶いとおほくかけり。七の巻古風の歌に出せり。さて大の数

のるハ。猶く深くうちにいさくら数あるのさをこえつゝ

さへる だにる よまる あれる うべる なぞる

此まびのる 万葉にハ猶多し古風の歌にも出せり

きる 三の巻にもその歌に出せり ぞる りぞ こそぞ いづれも三の巻ぞの歌に出す るあそ こそるあそ そるにこの巻

その歌に出せる やる 同巻やの歌に出せり かる 同巻かの歌に出せり こそる 同巻この歌に出せる

〇とても 俗に此のまをかくし

新拾 十
とても かくかりけり世なりしぞらふなにぞなきさ人乃ならずらん

新後拾 上六
なぞとしよ久年歌いそ格 とて よ後添りなつべきこ歌なりらぞ

こまハいやしき例にて古くハ歌に文なとみえぬることなし

んまべし いつそとあし そこもとなどやうにいふそことは別なり

ぞ

〇その歌ひき。総体の中の歌に係りの辞にて。一の巻に出せる三格法則の助

し。歌の中にぞはなと結べる歌おほくして。んとそゆるれの歌はおのづからかれらが文や。何ぞなどは疑ひの辞なるゆゑに。ぞのかゝりんともゆる歌おほくして。なと結ぶれはまぎらはしきこともおのづからよろしきもあるもの也
ゆゑく紛らはしきはの中にぞや何などそは誤りし結びを正しくせざれぞそのひがことなりのあるを

○ぞの結び辞をはぶきながら猶下へ続きたる歌

後十一　かひえてはなぐさむやとぞおもひしになごりしもなど恋しかるらん

堀川百首　ちりはぐさうしみてのとぞおもびしかどこよひあかぬあふの松原

後拾遺　おぼしくぞありつゝとおもへども君ふるはとはまづぞこひしき

右の歌どもしといひらんといへるは。ぞの結び辞なれども。皆下へ続きたるなり。いづれも皆よろしかれば。此格の格さんもまどべきなし。後成ての歌又此ありけれ　皆よろしかるべし
まじめばなぞとまるとおりひとでやりみをさまし。此歌は結ぶ皆よろしか
ぞらくのひがことし。ことぞれはなをぞなき字し謬まる物なるべし。

○ぞの結び辞をはぶきして下へつゞきたる歌

玉葉二 小式部　春かとぞよそふえつまどはつかなるをりて八重さくかなりけん

同十八 読人しらず　いまもさぞなうかるらん身ならてさへつらぬばかりぞ新しきなれども

よみ人しらず　えづらしき春も此月とぞゆゆしきばかりまさるに恋しきまさらん

右いづれも皆しと結ぶべき格をはしとそへたるかしてて下へ続きたるなり。此格もきゝよからぬなるべし。よみる歌の中にも時々そのかたちも見ゆ。二三の句中よかりしと難ぜしことなり。

○ぞとかゝりて心にと結べる歌　附ていと結ぶ

夫木 為家　ちる宮はいまのぼりたるかつら山かぞ老ふきるか那
此ぞは曽の字を書きたれど誤り字しほぼ多きことなりかたちより条は之らは今
とともひらくにも正し

後拾遺 集　さくら花おりふし行きまりにちるをおりつれをぞ風にまかせつるらん

玉十一　見てしもぞまさるうつゝの思ひねをさましとぞうき寝の夢
むかひ出でゝもとて来そそのかし　風雅十九うきれきて待つかるると神垣に　ちぎりかけるわぞあやれむかる。これハときぞ　ともあり今度ハかゝるぞきるゝも字据く一本よろし。堀川の百首のさゝめかけ世〻の羽衣きて見れ　と字し据えるに一本よろし　の山風冷えて　いかりもえんぞと思ふぞ　もかゝる。此ぞも字し据ゑるかり。新後拾遺云　古本に見えたるかく　これよろし。見てぞとかゝりてつと結ぶも例なし　おぼつかなし

○動かぬ言にて結ぶぞ

古十八　神無月しぐれふりおけるならの葉の名におふ宮のふることぞこれ
ぞこれと留りたる歌ハ万葉集にもこれありて又ぞといひのべして　これと留まる也　万葉六の巻にもあり

後十二　むかしにも思ひみだれて　ゆるされし人の心をいまぞよのつね

後拾十二　おほかたはみたまちとせてよひくに見えしみむ氷ぞたえむく

新勅十九　かゝる身はあはでやはゝとまもるちぎりぞ人のなさけなき

新後拾十七　年ふれどかはりも見えぬ名取川うき身ぞ今ハ淵と成りぬれ本

古十七　おほかたは月をもめでじこれぞこのつもれば人の老となるもの
此ぞもうちあひのかゝりにて結びたれば也。抜き出ていはゞこれぞこの　といふ上のことハ月をさして下のこの老をさせり。されバこれぞこのことやこのあたらふ詞そこなはしく見ゆるはつなぎたりといふべきなり　ぞてふ詞のこのかゝりよくいふべきものなし。

後十一　うば玉のひとよばかりぞあふことのかたきをみれバ人をよおもふてそうらめ

狭衣　めにちかき見るわが身ぞふじの山よ。なに　ゆきつもりたりかつもえつゝ
こゝハよもぎといふ詞を下へかへりぞつゞし　なにといふ詞も上へつきたり

古十七　よのなかはうきものからぞ思ふへき身ぞとなりといへどもまし物を

千十二　わすれじやおもふこゝろの深かりしバこれぞおもひとも見えさまし物を

万十八　はしきやし今はいまぞさらに人をいへど思ハさぶしと思ひしかれバ

これらも同じ格なる例として下へ引きつべし

○いひかけて結ぶぞ

千又 霜さればまがきのしのはつゆしげしおもひみだるに[ぞ]ちる菊の花

同十七 今わかれつるたもとはかはかねどむすぼゝれ[ぞ]ぬるゝ涙乃そで

新十五 うつろふもゆくかたからの秋なれど今はよそに[ぞ]きくの上の露

拾六 とかるきばこゝろきのこ[ぞ]つらし桜うしてまつべきほどをまたねば

後拾十九 有てやはあせざるべき津の国のいま[ぞ]いくたの杜といひしかて

千六 あふさかていま[ぞ]あしぢにかゝる山すゞかるこれの名にてきこえし

新十七 行すゑはまだとほけれどむかしのこの[ぞ]しのぶ草をまつにたえせしつ

同十三 わすれずやたりふたりをそのことはえ[ぞ]やましろの井手のしがらみ

此歌ハやまずといふまでのいひかけなれどえしもきこえべきぞといひてよきにはよくせるしいひかけなるとぞかくてもよかるべし

た十三 あひくてまれにこよひ[ぞ]あふ坂のゆふつけ鳥はなかずもあらなん

これハなほといひかけたる相応まで切れて。下の詞のかゝりきようハ餘の格と異にして。やの格のいひかけの格びりし此格に移りて考へあはすべし。

○ぞ二つある歌

古九 山へゆく人[ぞ]すくなきはるすぎてこし数はたらで[ぞ]かへりける

拾一 梅ちいろぞしあふがあて[ぞ]ふる山がつの花とし[ぞ]うつろひぬらん

金九 なにはえに[ぞ]人のつゝみハたえてしまたにはみを[ぞ]たのまし

玉葉又秋ぞかはる月しこえしは昔にてよくへし新古さかりぞみゆる。これも右の歌と同じ格なれどもこまかくいはゞ二つのぞのいとひなし

拾七 おもかげにたちくる花でおもしきて[ぞ]みれ[ぞ]。ともあれ

此うたハ上のぞハなきといふにて結びたり下のぞハ切るゝぞなるを
ぞと受て結びたるなり

拾遺恋三　秋風にしなびく尾花を夕まぐれたが袖ぞとぞあやまたれける
これハ上のぞハ向ふるぞにて、留るをぞと受て結びき、下れぞハかゝるにて
ひきづり

○切るゝぞ　例のうたどもにおくぞし

古十一　いでわれを人なとがめそ大船のゆたのたゆたに物思ふころぞ

同十二　こがれゆくへもしらずぞありけるとおもふぞ

後九　浅しとてふかく頼みし山の井ハあかずしなどりに契りてしぞ

詞十　花ぞとてえるまもあらず咲いづる誰をまつとかみちのべのぞ

後九　玉がたれいつまでか(?)ころの涼しきをぞ結ぶよの袖なるへとぞ
ぞぞと答うるなり万葉なると
ことわれるなるなり

古四　をみなへしうしろめたくも見ゆるかな荒れたる宿にひとりたてれば

同十一　思ひつゝぬればや人の見えつらむ夢と知りせばさめざらましを

拾古　ある夜ふけつゝふけゆけばは夜のつゆぞうつりのみへるよりにぞなりぬらむ

千十三　かねてより思ひし事ぞふし柴のこるばかりなる歎きせんとハ

新二　いつしかと人のこゝろのかはるべくうつろふ色ぞいとゞせつなきよ

又ぞと切るゝをぞと受て下へ結びたるなり

古十五　人しれぬ思ひやなにぞ涙なるものぞとおもひしかどもあはれなりける

後三　又もなき人ぞと思へど忘られぬ数ならぬ身は惜しき春の夜

同九　逢ふことはかたきにぞと思へどもなほ人知れずかよふ心の

又

古十二　わがごとくものやかなしきほとゝぎすときぞ。ともなくよたゞなくらん

同十三　秋の夜もなのみなりけりあふといへばことぞ。ともなくあけぬるものを

これらのぞハかろし読ぞと切てことゝ定て
下へつゞけたることハ上ニ同じ　又

後拾十五　なぐさめば月さへぬあはれまで忍ぶるかどもかるぞかし

新古十七　いかにせんしづが園生のおくの竹かきこもるともよの中ぞかし

同六　もみぢ葉ハおのが染たるいろぞかし‖よそげにおけるけさの霜かな

千十七　たまもみがける玉ぞかし。と思ふをもむなしき苦はかなし

これらハ切てぞの下へかしを添たるにてかしハ
切たる言の下へおく辞にて多くみの字かしの詞にいへり

○結びて留るぞ　これハ必上ニ何等の辞をおきてぞと切るし

拾二十　ちくにげに流れてしまぐくしとをしぎすましてひの杜ハいかにぞ

後一　春なりといふぞ‖梅やかほるらんわがやどの梅枝をいろとかをしらず

拾十二　是れそこともおもふだにまで様やハせしなふぞ‖心ろにわたらがくれそ

これらハなふいふなどの下に他の言をへだてゝつゞけてぞといふ
又言を中におきてしるそ

○後六　きこゆべし人もしのぶるむしもしげるたきまつ虫の声にまよふぞ

同十六　うつくしまひの恋しきとも思へりまさるれしきまにまでふころぞ

拾八　みをしれや音なすめる枝もなかむ我へし人をまちていくよぞ

同十　ちかふるあきぬきのかたみなるはかなきをとまるハたが子ぞ

新六　いかなしよまでてふくちんみるかたハいかぞかぞ宿のあしぞ

源氏若紫　いかなりしむかしにはで新まくらてあさのかく浮井のへだてぞ

後七　まつきどきとあくぼるがもぞ‖我がやどの菊の宿がさきるよがそがして

拾右 いろだかはらしためのぞかづらきの久米路の橋の中にたえなん

同十八 いくよへしいそべの松ぞむかしより立よる波や数はしるらん

又

金八 あさましやこはなにごとのさまぞとよ恋せよとても生れざりけり

堀川 はるがすみ花のさかりはゆめにしてあふぞ長き秋の夜ぞとよ

これらハ下にとよといふ辞をそへたる格とよの結にもあらずとよの結よ出せり。

後拾十六 かたらひし人もなくてたのもしきかなわがのみさゝがにぞこハ此ころに見ゆ

○ぞは これも上の同じかるぞにはを添たるにてちがふハまなし

六帖 しろたへ乃しろきをかくしたる白日雪にとまるつきしもたがためにぞは

源氏竹川 うちそれてふかくはなしぬよの一こともいふべき人もかゝるものぞは

六帖 たまふより思ひみだるゝこゝろぞはしらぬぞ人乃つらさなりける

又

古八 かへる山なにぞは有てかひあるはきてもとまらぬ名にこそありけれ

同十二 いのちやはなにぞは露のあだものをあふにしかへばをしからなくに（露 六帖）

同十九 まえなくになにぞはよきかゝるやのみぞきてはあきそも

家万下 かくばかりなにぞは恋にかきくらし草のまくらは紙しきくらん

○ぞも これも同じかるぞにもを添たるも

古一 色よりも香こそあはれとおもほゆれたが袖ふれし宿の梅ぞも

同四 ぬししらぬ香こそにほへれ秋の野にたがぬぎかけし藤袴ぞも

後拾四 いそぎつゝ我こそきつれ山里にいつよりすめる秋の月ぞも

新十六 むかしみし乃雲ゐにもいでゝまたなげく山のはひハなにぞも

堀川 ゐそ かやり火をまぢかくたてゝ山がつのおのが煙にむせぶなる[ぞも]

○ぞや　これも同じくるぞにやを添へたるにや八疑ふ詞にて歎息のやうし

拾七 いかにせし海士の苫屋へしいづこ[ぞや]深めぐるそでとしりしそ

新勅十三 小弁 いかなりしとき[ぞや]美木に見しにてハそれと思へるはこゝろにかゝる

此ぞやもいふぞやなふぞやなど又多しいづれもやハかゝるひ乃やよ似られたるにいふ歎息のやうり

源氏 あげまき いつ[ぞや]も花のさかりに一めみし木のもとさへや秋はさびしき

これも同じぞやなるを今世の俗言にいふいつぞやと同じことばなり

○なぞやハ何の意何の詞りし出なき

○一つのそ　これハ得てよめり但し実ハ読むべきか誤るべきかさだかならねど

後十六 みちしらぬいく[そ]のよゝに身をへつゝやみのうつゝをなげきてへつらん

拾古 あさましや木の下陰のいちしるくいく[そ]の人乃秋をへつらん

これまたいはゆるの金葉八

同十又 かぎりなき思ひのそらにみちぬればいく[そ]のかずやとなからん

好忠集 えもたえず忘られぬるかくもなるまでいく[そ]かおける萩の上に露

同 うつりゆく宇治の川瀬にすみつゝていく[そ]月日をかぞへきぬらん

兼盛集 あしたづのむれゐる赤沼まつかさいく[そ]かきよの千年経ぬらん

新古 うき人の月はなに[そ]のゆかりぞとおもひながらもうちながめつゝ

此なにぞハ向かへるぞのぬくすと此なるえ上どのとて下に向かへるぞハ辞ぞ。

きこゆれバいくそのそにはひとしくきこゆ

上件いくそのそハ十なりと思へれど古今集物名にいくそばく庭

よく文字のうちにとよめるをもえたれバ十にあらで添へたる辞なりし

おぼしき事にも出せるけれバいくそよびとどいふそも同じ

くて十はあらざるべし。又昔十のそとあれバ新古今のなふその

とよめるハ。例なきことなりけるやうなれど。さだめがたし

○けりぞ

これハめづらしき例にて。けりやぶりとはつねにかなはず。つゐのぞと
一つなりともいひつべし。然れども常のぞの例ども。但しんと然づる例をおし。せん
ぐるゝべき事なれども。ちゝとやうにむすびけり。

後十 ゆきかへりみしもまたで衣よそへてあやなくしみけりぞちる

金一 春霞たちぬるまでたづねん山ざくらさくらうつろふのはしけりぞふく

詞三 秋山乃霜ふりおほふこのはちりやどる月のかげけりぞちる

新十 かのをよるきえなばしらでながらへだおもふよるはけりぞちる

後九 天の川ながれてこひぞうつけりぞあるはしをとはせなやくみん

又はじめながらはやぶるといひきとまれよ有

正治二年 うえ宮定家 柴の戸のおとうるバかりきかるをよわきれぬ人乃かよふけりぞとふ

新十八 うつろはで色をかりけん人よそへてけりぞちる 舊地かけ

新勅十四 万十二 まてく 立るゝ思ひのでけりぞ思ふ ゝをなのかわりもたまきいふにもちかくを

これハけりぞの意ならぬのにて。ちかぞと同じことし。上の格とハ異なり。新葉にハ此てふそを格こゝにわり。古今集よりこなたの此格をえしぞ。さて後撰
十七宮家で志なぞらなきてあかきを見ゆる人。今ハさりけりぞかぎりあるこそ此格なりし例なり

○しもぞ

これハしもしくぞといふ意にて。ぞハ添たるもの也。
けりぞのことばにかよひ。されどしもハ却てといふことを強くふくめる

古一 春雨しばしふりて水かさもけりぞみづまでものかぞふかる

拾六 霞たちふりでしと思ふ人しもぞ時雨ゆくこゝろ旅ゆきける

詞七 あぢきなく人なさけるのしけりぞ花のあらきをくぞふちる

後拾十一 うれしさを思ふべかりしかば［しかぞ］いそぎ秋さへそふこちもちる

後拾三 後れ粧 はるばるとかちのこずゑばとはしらで花見て［しかぞ］またも恋しき

新古 まちの戸をおしあけてみれば月見きばうき人［しかぞ］恋しかりける

此うたのしかハ都ての事をふくませたる

○さぞ

後拾十 思ひやるかれなふそのさびしさびて芦のうらさはハ［さぞ］あれきん

新勅八 朝あびの袖秋わかくかに宮をかきつさめ秋も［さぞ］とおもらん

続後十三 うちもちれぞなしたえぬべきかつらしさしぢの宮ハ［さぞ］つもるらん

続古九 ふく風も［さぞ］まかりし うづしまくかち里のさの秋乃夕ぐれ

同 夜さむなる月やのきくきの秋風をしそよ［さぞ］衣もまきころん

続千十 あづまぢのいはさきこゆる道をさへかくうち見えまよふ夜を［さぞ］とおもふ人のなき。

玉葉十八よみ人しらず きみやさぞ逢ふ人々いそがしくかはるく月を今ハさしまぐらむ。上ハやといふの意のうたなりしぞ

又下に字を添ふることもあり

千五 あはれともみる［さぞ］なむかし秋ぞ寐ざめぞとありつる袖のなぐさましき哉

新六 涙かくぬ山のいはね旅寐見ぶる［さぞ］なこのまの月ハしらじき

同十 袖ほしぬけ［さぞ］な旅寐の夢も見じ思ふ方より通ふうら風

又やを添ふるハ見づらし

続古十三 公実 旅をきまくによりしかばひてはしたのめそこぬハ［さぞ］やつれきと

又右乃歌た秋づくおしそうたるさるハあらで。しで秋ぞと

いふことをて己がうへのさしかくさる秋いづるとあり。

新又 露を拂し袖やほすらん さぞ なほおくかなしき秋のならひなるらむ

續後古 宝治百首 さぞ なげく恋をするがの山かつのたえずもえし跡だ

堀川 百首 きりぎりす秋のつきれば夜をさぞながきよすがら鳴あかしける

○やぞ 此の言やの部に出す也

○なかなかぞ なかなかきかせそ などの詞ひきしも 五の巻の部に出せり

の

○のの結び。紐緒の中に行結ばくの辞にて。ぞや何などと同じきなり。上に出せる三轄説の結めし。但しぞや何にくらぶれバ。のはやゝ軽き也。

かの定まれる格にはづれて結ぶこともあるは何の説。左にあぐるがごとし。

古二 山吹ハあやなゝ咲そ花見んとうゑけん人のこよひこなくに

同十四 何ふまでのかくこそ我をあはせんよ見てもこゝろのなぐさまなくに

同十五 我のみや世をうぐひすとなきわびん人の心の花とちりなば

同十七 ちはやぶるうぢのはし守なれをしぞあはれとハ思ふ年のへぬれば

新十三 れもかずなるすゝむまで恨まれぬ我なごりき人の月にたのまれ 文 かく結べくもなきをかくいひても有りけり

古六 花の色ハ雪にまじりて見えずともかをだにゝほへ人のしるべく

後拾十七 きこえも何へぞそうなき後の森ぞうぢやましやと人の見えけり 文 かくさまうとも見えず也

金一 ちりかゝる浮き花を雪かとちらしても花には袖[の]ぬれぬ□なりけり

こゝはぬ□へかゝりけれども格下へはいきて係る也

文

月三 今よりはちゝろゆるさじ月影[の]ゆくへもしらじ人さそひきなば

新三 むすぶ手に影みだれゆく山の井はあかでも月[の]かたぶきにけり

こゝのゝも定まれる格のごとくかるし結びては井よりとらるゝ心なき也
て係るとく結べり

千六 玉づさにかきこしおもひのはてゝちりしてむかしとぞ思ふ[の]なくなりき

こゝはなると結びてもさしつかへなき文なれども宜しき文一本には
「なぞなく」なるとあることもこれ又おとれり

件のうたいづれも定まれる格にはたがへり。そや何などにはかく
の例なし。のをいとゝろ異なる事也。然れども右のおもく□
どく結ぶてはのとあるなる例なれど。さらに此いきざしはよくよく味はふべし。

ゆめゆめこゝろをもちひてみだりによむべからず

㊟ □ のの結びをなくばまで切る事さ これをしひてまとめるべし

古七 ちはやぶる神[の]きりけん□つくからに千年の坂もこえぬべらなり

万九 むこがくしおくぶしの玉[の]まごひふみまふりし□此川の瀬なり

六帖 さる田[の]いとぬるし□なごの海士のつりする小船さし帰るらむ

拾玉 くまなかりし庭の袖[の]なりにけり□さわぎ人のくれの暮方おそし

○ □ のむすびおほくとなへる事 三つをつよくするればしまさぎ

古二 今もかも咲きにほふらん橘[の]小島[の]崎[の]山ぶき[の]花

いせ物語 きし方のとも春[の]かぎり[の]なか[の]日[の]夕暮にさへなりにけるかな

こゝはロつゞきなり

万三　いほはらの清見の崎の三保の浦のゆたけき見つつ物思ひもなし

此は五つある中に浦のゝのは俗言がといふにあたりて上四つのゝとはことなり

新六　冬がれの森の朽葉の霜の上に落ちたる月の影のさやけさ

こゝは四つと二つと也

又

門二　風かよふ寝覚の袖の花の香にかをる枕の春の夜の夢

これは三つづゝ二つ但し袖ののの花ののはがの意にて餘のとかはれり

○のと留る歌

古十六　吹まよふ野風をさむみ秋萩のうつりもゆくか人の心の

好忠集　野がひせし駒の春よりあさりしにつきずもあるかな淀のまこもの

源氏蛍　あらはれていとゞ浅くも見ゆるかなあやめもわかずなかれける根の

栄花ゆふしで　うくとぶらんしづくも有るを　その夜のかなしく袖にむすぼほれけりの

○間の詞より受るの

古十四　君やこむ我やゆかむのいさよひに真木の板戸もさゝず寝にけり

後拾　夕さればたのめしぞまだ人のこんやたゞやのさだめなければ

新十三　わが恋の行末までは知られけり今八の身なれば思ひかぎりぬるかな

門十四　うらみわびまてど今はの身なれども思ひなれにし夕暮の空

門十六　有明の月だにあれや郭公たゞひとこゑの宿の庭にも

後拾十八　見し人もなきが数そふ山里に心もしらぬ秋の夕暮

万十二　丹波路の大江の山のさねかづら絶えんの心我が思はなくに

又玉葉十四とあるも今八にしもの四方もまされども八るき月のよかげのうのの心いつぞとさをのこえきく余は有ぞ多しき

同十三 月のうきに思ひあまりの心ぞくハ秋さへ流るきみの名ぞありけるに
風雅二 さびしさハ花よいつの□ながめしてかすみにくもるさよのそら
同十二 なからふ涼きちぎりをきく中に人ぞもきぞの□なくしまかるバ
こゝろハ思ひてかとをるにかせる物ぞ、同じき様なかしもかしくいや
しく思ぐましきらひなし

○さ□く結ぶの□

古口 秋萩をしがらみふせてなく鹿の目にハ見えずておと[の]さやけさ□

同十八 尽ぬらる峯のあきまで立ちなれぞのゝ思ひつきせぬよの中[の]うさ□

後拾 あふだうりなくてのゝ婦るもが恋き人にかゝるおと[の]まじさ□

同廿 夕されば袖ゆく風もふりしてまぐひきある都[の]かなしさ□

此様なおいとかなし此歌りのさ□を写し得りてきと思ふ本のかうふよりて後
世の人こゝまゝき□もみるとかうハ思ふてしうなびさ□しる葉ふもおろし

古今序 咲花ろりし思ひつく身[結]わびきなさ□身にいまつきのいふもきつるまで

定家
続古六 忘れいのちの[の]たのまさ□かくしてぞ治まる思ぞたのしきをつゝ

万三 まぐらなかくいそくせぢなるのゝせ川音[乃]さやけさ□をむぎろ照でらん
かくのごくありぞるもいつらゆまで思ハひくまれあるてしし

文

全口 そん川音ハまなお結紫白く後ふりとこや小倉山の名[の]さびしさ□

拾遺集 みぞまとぬるとくりまてる名結ちれぞのゝつきせぬ物やまろが身[の]うさ□
こゝまでハ上たや□とかくよれバつ□の様とハ異りしてのめと結てもいそくうか
あわり系のさびしさまろがこのうさくいふ一句を一つの躰の語のごくいひなし
ゆる物うしてか結やと□らひて神るみえるて結でる様とは同じ
○後拾遺十八□われぞりあかる此様な持ふりとあるはのゝう□さふくかなしさ□これ
を上はのといなぞ□をとくらひてさと□思なりゑづらしき様し文後撰十二かふをも
あ結みわとハなし□に其の指のよ□のみどかくて行るまび□しさ□こ是ハのかど三首
是とも三つながら□みりのさへをうくらざれぞの□かどあきにはど
○から□かとくふそてさ□と結ぶ例ゝ此次から□の部りしおせるを

○倍渡よ□からいゝふ言結の□

古十七 あの人へふりかゝづる船〔の〕おとなりぞにてぞきこゆるといゝなしまをを

同古 をぐろさきみつの小嶋〔の〕人ならば都のつとにいざといはましを

後拾古 君がもえおつるなきて〔の〕むねなりぞ流れぬきかけてみせましを

千十二 まりなしや思ふ思ひ〔の〕なかりぞこまでくまもみせましを

金八 まさ川人〔の〕おとをきく月なりぞぬれてたりしに新なえてまし

此ましハ下にあらぞとらひましてつるおのづから一様のやし さて

古十二 君こふるなみだ〔の〕とこにみちぬればみをつくしとぞわれはなりける

後十五 ぬるゝほどみかさのやまはさかりなれどてるむし〔の〕くるゝかな

同十六 おもひ出てとふことの葉をたれ見まし身〔の〕しら雲となりなましかば

同十九 わか道ゆくさ〔の〕うともおふなりせばそこゆくんとむふしせなれ

拾十七 船戸明てながめやすらんたなばた〔の〕あかぬわかれの空をこひつゝ

後拾七 萬代をしる千代〔の〕くもゐにて見ゆる雲かえの影なる松乃みどりに

同八 しらゝをばそで見てこそ八十かへりつまにやしや何〔の〕いろにはまゝらん

同九 人〔の〕世をふりてびきあふ袖なしバおびのやとおもろえてまし

同十 みなかみ〔の〕はじめてみれぞ君が代に二たびすめる堀川乃みづ

新一 何れもちしぬれば乃ぞり〔の〕春秋乃秋庭になびく暖みちおもる

同二 風かよふ袖ぞ見るぞ〔の〕花みちあふにうつる梅みちよしみち

万八 都にあるまきし小野〔の〕秋風にしまの萩さかぬまやあきのまつかし

右のあげたるもいづまものゝかゞようへたゞしみえれば俗りしよくきこゆるし 此五首の二首八のかとあらくきまりつる中に一つ此のは上下乃のと異なるをつくべしよくせばまぜひあんかし

○のめくといふ詞の□

古十 よし野川いはなみたかくゆく水の はやくぞ人を思ひそめてし

同 夕月夜さすや岡べの松乃葉の いつともわかぬ恋もするかな

このまくら詞は松の葉のごとくといふ心也此格古今よりはじまれり

○言をへだてゝ下へかゝる詞の□

古三 夏の夜の ふすかとすれば郭公鳴一声にあくるしのゝめ

後十一 あふ事しゆきてやえましはの空の 今をかぎりてふ 浦のなく鴻

後拾六 宇治川の はやく のどかなるなり何ゆへにかくさばからん

○いきかひあるの□

新四 ちぎりおきし其八千歳の声ばかりめやどろく月の袖のせばきに

続古二 後京極摂政 かへこずば庭はや秋のいろならんとへかし人の花桜かな

このうた袖のせばきに月のやどるか花のさかりを人のとへかしといふ事を二首共にうちへだてゝいへる也詞のかゝりにいきかひあり又新古今よりくだりて秋をさむみ秋のあはれによるかなのかゝりゆく。此道も尋べき事なれど新の事はかざりゆく事よつゞきて上へかゝらざる也この二首とはかはれり

○一つ詞の□

千十二 たのむ詞恋する人なりきなまてよの中の たや君なりかかん

これハよのつねの恋しやといふ心也此のをば文字ハつゞかぬかかるをなほハこれらの例ハなきしるしぞ

好忠集 人妻とわがの と思ふ川思ふまハなかれて袖をつのたのみまれり

これも人が妻といふ事にて此の詞のと同じことあるをいひがたのまゝ是なる心此字ハ辛といふをさるらしてよめり

○一つ詞の□

新十八 君が代をいのらばまつ玉の緒の一すぢくるとはたれしまれ尽きず

是ハあらんハ何を玉の緒にせんといふ本末をそらへかし。玉の緒といふ下へ本末の詞の余せんといふ
事をふくめて三の句にて言ハ切らるゝを其の玉の緒をやがて下へいひつゞけたるもの也

同十九　いはぞ川岩やまぶきに秋〔の〕下つ岩松乃まに川のゆふ風

是ハ秋といへる下へあらんといふ事を含めて岩やまぶきに秋あらんといふ意にて秋にて言ハ切らるゝを其の秋をやがて下へも用ひて松の風ハ秋の聲のするといふ意也

右の歌共。すべて一首のうちにてハてにをはをそへおくやうならぬをならべて新古今のころをかくむつかしく詞をつゞけるハおほかりし。これらハ殊に。後世にかゝるを詠む人乃まねぶべき格にあらず。

〇捨の [ ]

古十四　うつせみの世の人言の繁ければ忘れぬ〔ものゝ〕かれぬべらなり。

詞二　なく聲をきこえぬ〔ものゝ〕かなしきハ花ハちるらん

新十三 いせ物語　君こんといひし夜ごとにすぎぬればたのまぬ〔ものゝ〕恋ひつゝぞふる

〇のや　これハぞのといふべき所へやを添へたるのにてやハいとかろし

古十　何ふくと〔のや〕桃の花さく

拾十四　いつれ〔のや〕いつれ時佐の名く

新後撰十九 小大君　春日野〔のや〕末賊にかゝる白雲ハ云々

万二　石見〔のや〕高角山の云々

六帖　河内〔のや〕かゝしの山の云々

宝葉　ちつせ〔のや〕ゆづきが下に云々

日本紀の歌にもあふみのやをあまたよめり
又地名の下ならでも

万十四　みなと〔のや〕芦が中なる云々

堀川百首 萩の歌　ふしき〔のや〕もゝしく花もさく

又云旅よごとのひのやとも是ハ万葉の歌を誤せる語也又玉葉十八にわかしのやとも
ことハありけりやといふよのを添へたる例なきことなり

〇願ひの辞ある下におくの [ ]

古一　春日野のわかなつみにや白妙の袖ふりはへて人〔の〕ゆくらん

同十四　しのぶれどゆく花ちる川のよどみなばこゝろかりしや人〔の〕おもはん

同二　宮人のこぬるゞふわら袖さくら花いかにせよとか風のなくらん

同四　昨日こそはなへとりしかいつのまにいなばそよぎて秋風のふく

同八　いのちだに心にかなふ物ならばなにか別のかなしからまし

これらハ上よりや何などゝうたがひの辭をおきて下をその結びにてとゞむる
中間にありおくのかゝり此格いとおほし

古一　春たてバ花とや見らん白雪のかゝれる枝にうぐひすのなく。

同八　けふ別れ明日ハあふみと思へども夜やふけぬらん袖の露けき。

後十六　大あらきの森の草とやなりにけんかりにだにきてとふ人のなき。

拾七　神なびのみむろの岸やくづるらん立田の河の水のにごれる。

千四　秋風やなみだもよほすつまならんおとづれしより袖のかわかぬ。

新六　秋篠や外山の里やしぐるらんいこまのだけに雲のかゝれる。

右ハ上よりやとかゝりてらんと結びてさて下にそのゆゑをいひてとぢむる
格なり。此格もいとおほし

件ののもじハ。結の外異なる事なけれど。からやうの歌ハうたがふ
ぞのといふべき格なるにいと浅くたがへるに出きたる。

◎そくのそくやといふの（後拾遺ハ何なるや春の日やなどいへる類なり）雲の色やの類に出せり

が　濁

○がをのと同じさまにて結びもの結格と同じ

古十九　さかしらに夏ハ人まねさゝの葉のさやぐ霜夜を我がひとりぬる

拾一　わがやどの梅の立枝や見えつらん思ひの外に君がきませる

同十九 東しそハふしてを行し見る屋どのむねにぶふも君がきまさぬ

万二 我がせこをやまとへやるとさよ更て暁露に我が立ぬれし

同 さゝなみの志がさゞ波しくしくに常にと君がおもほせりける

志の字古の詞ひ皆の語格也 又むすびにつゞけぬから也

古十六 ぬるがうちにみるをのみやハ夢といはんはかなき世をもうつゝとハ見ず

後九 秋の田の稲てふ事をかけしかば思ひいづるがうれしげもなし

同九 わくらせといちふを見れる咲なげし名がためは何か花ぞ有ける

同 ちらよ絶きくが中にもかなしきハ人のなさけのつきやしぬらん

拾九 世の中にあらましかばとおもふ人なきがおほくも成りにける哉

○さと語ぶが

古十三 うつゝにはさもこそあらめ夢にさへ人めをよくと見るがわびしさ

後三 風をだにまちてぞ花のちりなましこゝろづからにうつろふがうさ

同十六 なげき木にまがれる枝も有ものを毛をふき疵をいふがわりなさ

万四 とほくあらバわびてもあるを里ちかくありと聞つゝ見ぬがすべなさ

此格なる万葉に多かるべし。すべてさと留る辞の詞の下をうくるハ皆のとくなり。の字に詞多く出せるがわびし。用の詞の下をうくるハ右のごとく皆がとかまり。但し万葉に妹がかなしさなどいへるハ辞の詞乃下なれどがとよめるなり。此ちす格次なりといへり

○つまハのといふ辞をも万葉にハがといへることおほし。古今集よりこなたハたゞ辞の詞の下をうくるハの用の詞の下にうくるハがなり。但し我がおのがたが君が妹がなどの類ハ辞の詞乃下なれども後までもがといへり。そのほか萩が花梅が枝浅茅が原甲斐が根などいふもがといひならへることなし。

○ゞ多紀定のか　六の巻ゞ多の説に出せり